

アオは、澄み切った美しい空を、大きな窓から眺めていた。部屋の居間にあるお気に入りの窓だ。彼女は、そこに浮かぶ白い雲を、見えない風を、きらめく陽光を、その目と肌とで感じ取った。色を味わった。至高の料理を堪能するがごとく、じつくりと。

彼女は、この部屋ですべての物語を描くつもりだった。この世に存在する、すべてのものの物語を。アオは存在から物語を引き出し、キャンバスに表していくのだ。自分という漉し器を使って。

物語とは、ときに残酷で、悲愴に満ち、激昂、暴力、虚無も含まれている。アオはそれをすべて受け止め、素のままであることを許した。すべてを美しく描くことなどできない。完全な美しさがなければこそ、一瞬に対しての価値が高まる。咲く花は永遠ではなく、枯れる花もまた、永遠ではない。どちらも瞬間的な美を持ち、それらに呼応する者たちに、独自の歌を差し伸べる。歌は、呼応する者につかの間の揺さぶりを送るのだ。呼応する者たちは、そんな刹那の出来事である。その音楽に、価値を覚え、より耳を傾ける。今しかない瞬間。もう二度と訪れない瞬間に。

アオは外に出て、それら様々な物語に、歌に、色に、耳と心と目を向けた。彼女はいわばスポンジのようになって、世の混沌とした美を吸収していった。美はフルーツジュースと言っている。酸いも甘いも、濃いも薄いも、好きも嫌いも、一緒くたになって世界に広がっている。それらを飲みこみ、味わい、再び作り出すのが、アオの生きが이었다。

アオの散歩は遠くまでおよんだ。山、川、海、湖、町。昼と夜。風の吹くところ。虹の渡るところ。雨上がりの場所。湿った森に、日の燃えるビル群。甘い芳

香漂う果樹園に、カッコウの鳴く空き家まで。

そうして彼女は、出会ったのだった。とある店先で足を組んで座る、黒という男に。

黒は、アオにはじめて会ったとき、こう言った。

「見てください。あそこにキノコが生えている」

黒の指さす方を見ると、近くの森の端に、草で覆われた切り株があって、その切り株に、憑りついたように茶色いキノコが群生していた。

「ああ、本当ですね」

アオは、そのキノコが持つ柔らかさと、そのキノコが放つ光の種類の多さに感心して言った。

「あれは食べられるキノコではありませんか？」黒が言った。

「本当に？」

「ええ。きっと、この近くに住む者に聞いたらわかりますよ」

黒は、キノコとアオを交互に見ながら言った。アオは、キノコが食べられるかどうかなど気にもしなかったので、その話題は二人の間にふわふわと漂った。

「あなたは何をしている人なんですか」

アオは、いまだに足を組んでくつろぐ黒を見つめた。黒の足元には、同じく黒い四角い鞆が置かれている。アオは、その中身が少しだけ気になった。

「いろいろ回っている身なのです。この町だけでなく、この国、この世界中を」

「わあ。羨ましいですね。一番よかった場所はどこですか？」

アオの質問に、黒は少しばかり身じろぎをした。

「どこでしょう。結局のところ、私は観光をしているわけではないのでね。仕事で行っているだけなので。けれど、そうですね、嵐が起こったあとの町並みは、けっこう好きですよ」

アオは、わずかに眉をひそめた。

「そうですか……。たしかに、荒れた天気のアとの森は、新しいものを生み出しているような気がして、私も好きですけど。町となると……少し意味合いが異なるような。だって、嵐のアとの町は、破壊しかない気がします。電柱が倒れたり、塀も崩れたり……って」

「ああ、もちろん、そういうのもあります。でも、私が言った好きな町並みというのは、そういうのではないんです。嵐というのは、ただの嵐のことではないんです。すべてを変えてしまうような嵐のことです」

「……おっしゃっていることが、よくわからないんですけど……」

「私は、破壊されたあとに起こる人々の悲しみが好きだとは言っておりません」  
黒は、そのときはじめて優しい口調になり、アオに向き直った。「ただ、破壊のあとに訪れる再建のかたちが、私は好きだと思っているのです」

「……ああ。それなら、私もわかります」

「本当に？」

「ええ。破壊は結局、創造には欠かせないものですから」  
黒は推し量るようにして、アオのことを一瞥した。

「そう、あなたはそういうことを考えるお方か。………アオさん、こんなことを言うのもあれですが、私と仕事をする気はありませんかね？」

突然のことだったが、アオは、まるで自分を外から見ているかのように、不思議と冷静な声で返した。「仕事？」

「はい。そこら中を回って、旅をする仕事です、いかがです？」

アオは、この誘いの大きさを知らうとした。そして、これから起こるであろうことを知らうとした。だが、こちらをまっすぐ見てから、再びキノコへ視線を移す黒の姿を見ても、どこにも答えはなかった。

アオは、この仕事をするこゝで得られる可能性のことを考えた。

「具体的には、何をするんでしょう」アオは質問に質問で答えた。

「あらゆるこゝろへ行くのです」黒は、キノコを見たまま言った。

「それがやることですか？」

「そうです」黒はこちらを向いた。

「お金は？」

「私がすべて負担します。あなたは助手ですので、もちろんお給料も出ます」

アオは口を開いたが、言葉が出てこなかった。黒は、やや沈黙したあとに、腕時計を見て言った。

「……では、私は少し急がなくてはなりませんのでね。答えはどちらでも構いませんが。もうそろそろ、私は行きます」

「待って。もう少し考えさせてもらってもいいですか」  
すでに椅子から立ち上がって鞆を手にしていた黒は、くつと首を傾けた。

「なぜですか？ もう答えは出ているはずですよ。その次に、あなたがそれを口に出すかどうか。……列車は常に、一本しかありません。それに、乗るか乗らぬかだけのことなのです」

「乗ります」アオはぽつと出たかのように言った。まるであと先も考えていなかった。ただただ口が勝手に動いてしまったのだ。

黒は、顔色一つ変えなかった。驚くことも、微笑むことも、頷くこともしなかった。きつと、アオと一緒に行かないと言っても、同じような顔をしたに違いない。それくらい、彼は平然としていた。

「よろしい。あなたは、切符を受け取った」

黒は言うや、何かをアオに差し出した。

それは、長方形をした小さな紙きれだった。厚みがあり、真ん中に矢印が書か

れている。矢印は、アオの方に向いていた。

「さあ、では行きましょう。旅の準備はしてありますか？ 必要であれば、自宅まで戻っても構いませんが」

「待ってもらえますか？」

「もちろん」

アオは、黒の視線に押されるようにして、急いで帰った。彼女は早歩きから、やがて小走りになった。ようやく自分の部屋のドアの前に来て、鍵を開けているときに、自分がわくわくしてきているのを感じた。そのわくわくには、半分恐怖も混じっていた。恐怖があるがゆえのわくわく。興奮。新たな世界を見る戦慄。そのときに感じる寒さ。それを思っただけの不安。それらの感情が、まだ見ぬ世界への楽しみと相まって、不思議な震えを生み出した。

アオは自分の部屋に入ると、ベッドの下からスーツケースを取り出し、その中に着替えと、歯ブラシと、スケッチブック、ハンガー、タオルを何枚かと、入る分だけの食料を詰め込んだ。

他に何か必要か、部屋を見渡して考えていると、部屋のドアがノックされた。振り返ると、開けっぱなしにしていたドアのところに、黒が柱のように立っていた。

「他に何かいるものがあるかしら」アオは、自分に問うかのように、黒に訊ねた。

「旅に必要なものは、それほど多くありません。現地で困っても、それほど後悔することはありません。……自分という万能道具しかありませんから」

「おかしなこと言うのね」アオは、そこではじめて黒に向かって、力が抜けたように笑った。「自分ってそんなに万能じゃないと思うけれど」

黒は、アオの言葉に肩をすくめるだけだった。アオはもう黒の方を向いておらず、懐中電灯や、カメラと、カメラの充電器などをスーツケースに入れていった。

ポケットに筆記具を入れ、ようやく持つていく荷物に満足したアオは、腰に手を当てて、もう一度確認をすると、意を決してスーツケースの蓋を閉めた。

「よろしいのですか？」黒が訊ねた。

「ええ、いいわよ！」

アオは元氣よく振り返り、スーツケースを掴んでドアを出た。

黒とアオは、それから無言で広場を通り抜け、駅まで向かった。黒はいつまでも無表情で、常に一定の歩幅で歩いていった。その横を歩くアオは、顔を初々しく輝かせていた。

駅のホームでは、もくもくと煙を上げる蒸気機関車が、人をたくさん乗せるまで発車するものかという具合に、頑固で貫禄ある姿を見せて止まっている。黒とアオは、そんな汽車の一番前の客車にそそくさと入っていった。

汽車は、それから数分後に発車した。汽車の思惑通りにはいかず客は少なかったが、時間が汽車を先へ先へと追い立てていた。汽車はそれに抗議するかのようにな、甲高く汽笛を鳴らした。

車内は、すべて四人掛けのボックス席だった。アオと黒は、それぞれ別のボックス席に離れて座った。アオは進行方向に背を向けて。黒の方は通路を挟んだ席に、進行方向へ顔を向けて。

二人は、互いの顔ではなく窓の外の景色を見つめていた。彼らはそうしながら、この旅のこと、相手のことを意識した。……………いや、これはアオ一人がそう思っているだけかもしれない。黒のことは、その顔からでは何の感情も、考えも読み取れなかった。

窓の外の景色は、次々と変化していく。大きく実った黄色い小麦畑や、滲んだ雨雲。点々と飛び散る白い渡り鳥に、規則正しく区切られた田園風景、相談をするがごとく密集する民家など。

そんな中、アオは、どれだけ時間が経ったのかわからなくなった。時刻を知ろうと腕時計を見たが、それ以前に、腕時計をしてこなかったことに気づいた。アオは何もつけていない手首をさすったが、もう何もかも遅かった。それに、時刻を知ったことで何になるのだろうか。汽車は変わらず走り続けるし、腹は十二時と知らなくとも、空くときには空いてしまう。

アオは、この現状を受け入れるしかなかった。

しばらくすると、ワゴンを押した女が客車に現れ、なにやら食事を配りはじめた。ワゴンには、銀色の蓋の付いたプラスチックの箱や、派手な色で包まれた菓子類、お行儀よく並ぶジュース缶やお茶のペットボトルがある。女は、乗客に何かを訪ねながらこっちへ向かってきた。

アオのところに来たとき、女は言った。「豚肉か、鶏肉か？」片言のような、つたない口調。アオは、ちらとワゴンに並ぶ物たちを見てから、「鶏肉」と答えた。

女は、一日に何回も客人に向ける笑顔のアオにも送り、ワゴンに積まれる箱の中から一つを取り出した。女はそれをアオに渡すと、笑顔を顔に張り付かせたまま、無言で立ち去った。

アオは、受け取った箱をまじまじと見た。蓋は銀色に光るアルミホイルだ。中は身が見えない。箱の底は、乗せた腿の上の温かさを伝えてくる。

顔を上げると、黒も、銀の蓋の箱を受け取っていた。彼は、決められた一連の動作であるように、銀の蓋を開けた。それから、また蓋を閉め、外の景色に目を向けた。

アオは、ゆっくりと自分の銀の蓋を開けた。湯気立つ鶏肉は、赤茶のたれにまみれている。アオはそれを、受け取ったフォークでつつき、食べた。そして、窓の外を見やった。

食事を澄ますと、再びワゴンの女がやって来て、空箱を回収した。彼女は、ずっと同じ顔をしていた。同じ顔とは、つまり、あの完璧な笑みだ。

しばらく黒の存在を忘れていたことに、アオは自分で驚いた。彼の存在を意識したのは、彼がワゴンの女に声をかけてからだだった。

「すみませんが、この列車の到着時刻はいつなんでしょう」

訊ねられた女は、首を上品に傾け、「このまま、行きますと、真夜中に、着きますね」と言った。

黒は、何か思案するようにじっと静止していたが、やがて、「どうも」と言い、何度か頷いた。女は笑みを張り付けたまま、去った。

それらの様子を傍目で見ていたアオは、彼らの会話が終わると、さっと窓の方に目を戻した。何となく、黒を目を合わせてしまう可能性を避けたかった。外の景色は今、緩やかに波を描く山の連続になっている。山は、次々と現れては去っていった。山の表面を埋める豊かな森は、触れたいと思わせるほど柔らかくに見える。森の中には、点々と小さな暗がりが存在する。アオは、その暗闇について考えた。あそこに住まう動物と、その動物が見上げたときに見える景色のことを考えた。そういうしている間に、黒がぬるりと向かいの席にやって来たので、アオは驚いた。

「あの山の中に、クマがいます」彼は言った。

「え？ どこ？」

アオは、山のあちこちに目を凝らした。

「いえ、ここからは見えませんよ。ここ周辺の住人による情報です」

「ああ、そう」アオは視線を泳がせた。

「夜になると、フクロウが鳴くそうです。朝にはシカが」

「へえ。たくさん住んでいるんですね」

「ええ。私たちも、いろんなところにたくさん住んでいます」

「……たしかに、そうですね」

「夜には、この汽車は終着駅に止まります。そのあとは、別行動にいたしましょう」言うや黒は、一冊のノートを差し出した。「ここに、町の記録をしてください。三日後に、また、駅で合流を」

「一緒ではないんですね」アオは言ったが、いくらかほつとしていた。だから、黒が「嫌ですか？」などという前に、アオは急いで言った。「記録というのは、何でもいいんですか？」

「ええ。どんなものでも。あなたの好きなように、そのノートを埋めてくださいれば結構です。旅費は渡しておきましょう。これくらいあれば、三日の旅は十分なはずです。お給料は、のちほどお支払いします。何かお困りのことがあれば、ここへ連絡を」

黒は、札束の入った封筒と、電話番号の描かれたメモを渡した。アオは、封筒にそこそこ厚みがあるのを確認しただけで、中身を見ることはしなかった。彼女は、これからのことで頭がいっぱいだった。

「うまくやれるでしょうか」アオは独り言のように言った。

黒はただ、頷くだけだった。黒はそれから、静かに景色を眺めた。

アオは、いつの間にか眠ってしまっていたようだった。目を開けると、外の景色が藍色に変わり、目の前にいた黒はいなくなっていた。通路を挟んだ席に目をやったが、そこにも黒はいなかった。アオは少し怯え、首を巡らし、車内を見渡した。

黒は、一番後ろのボックス席に座っていた。何をしているのか、目線が下を向いている。ときおり細かく動く肩から、書き物をしていると思われる。

アオは振じった体を戻し、前を向いた。前からは、またワゴンを押した女が現れ、客に何かを訊ねながら、弁当を配っている。

アオは彼女の動きを目で追っていたが、ふとしてノートのことを思い出し、少し眠気を覚まそうと、手を動かすことにした。ページを開き、ワゴンの女をちらと見る。そしてポケットから筆記具を取り出すと、彼女のことをスケッチしはじめた。

「豆か、キノコか？」

声をかけられたとき、アオは自分の手元に夢中になっていたので、どきっと飛び跳ねた。顔を上げると、変わらぬ笑みをたたえたワゴンの女が、こちらを見ていた。「豆か、キノコか？」彼女はまた言った。

アオはそのとき、ワゴンの女の顎がうつすら青みがかっていることに気がついた。女は、赤い唇を左右対称に引き上げたまま、厚いマスカラに埋もれた目をこちらに向け続ける。瞳の色は、分からなかった。

アオは言った。「豆で」

ワゴンの女は、銀の蓋の箱をアオに渡した。女の手は、とても長くて、節々がごつごつしていた。去っていく途中、アオは彼女の足元に目がいった。がっしりとしたふくらはぎの筋肉が、拳のように突き出ている。その下にある踝の腱は、アオの指二本分はありそうなほど太かった。

アオは、脇に置いたノートを見たが、そこから覗く先ほどのワゴンの女のスケッチは、まるでひどいものだった。アオ目を背け、豆の煮ものをパクパクと食べた。

時間は、この車内では粘着性を持って流れた。到着の真夜中が訪れるまで非常

に長くアオは感じた。時計を持っていないので、どれくらい時間が経ったのかもわからなかった。外は、墨で塗りつぶされたように真っ暗になっている。本当のところ汽車は止まっているんじゃないかと錯覚する。

アオは、眠るべきだろうと思った。これから先は長い。眠れるときに、少しでも睡眠をとった方がいいと判断した。彼女はそうして、汽車が止まるまで目を閉じた。

汽車は、疲れを知らぬがごとく、線路の上をなめらかに進んでいく。進行の邪魔をする者はいない。のっぺりとした夜空の端っこには、白い月が浮かんでいる。まるで、誰かが黒い絹に光の差し込む穴をあけてしまったかのように。

月は、常に同じところにいた。下を走る汽車を、月は見ていない。ただそこに、いるだけだ。

車内でアオは、自分が見えぬ何かに引っ張られていく夢を見た。水の中を進んでいくように、ゆったりと、一定の速度を持って、自分はどこかに連れて行かれる。横を流れていくのは、見知らぬ繁華街だった。寄ってくる人々も、それぞれ違う言語を話す。アオはそれらに耳を澄ませていたが、やがてひどい眠気で道に倒れてしまった。立ち上がるうにも、頭と地面が互いに磁石のように引き寄せられて、どうしても突っ伏してしまう。眠気は、眼球の裏から脳にかけてを支配しはじめた。

アオは、誰かに肩を揺すぶられた。何度かそうやられているうち、重い瞼を開けることができた。

見えたのは、明るく光る、車内の丸い照明だった。アオは、現実に戻った。脇には、黒い鞆を持った黒がいた。

「着きましたよ、アオさん。さあ、もう降りましょう」

アオは、脳内に綿が詰まったような気になりながら、スーツケースを持ち上げ

て、黒のあとに続いて列車を降りた。

降りた途端、夜風の冷たさが身に染みた。アオは服の襟元を掻き寄せ、すたすた歩いていく黒についていった。しかし、改札を出るときになって、そういえばもう黒とは別行動をしなければならぬことを思い出し、アオは半歩遅れ気味になった。後ろから、背の丸まった老人がせつつくようにやってくる。アオは足が動くまま、前へ歩いた。

改札を出ると、シャッターの閉まった小さな店たちが、両脇にずらりと並んでいた。その上から、青白い照明がもの悲しく通路を照らしている。汽車から降りた客たちが、その通路を、前かがみになって歩いていく。

アオは、黒の姿がないことに気がつき、あたりを見渡した。

しかし、黒はもう、どこにもいなかった。本当ははじめから存在していなかったかのように、黒の存在は、跡形もなく消えていた。

照明が、アオの後ろから、徐々に消灯していく。生命の糸が切られるように、ぷつ、ぷつ、と音を立てて。

アオは、スーツケースを転がして、前進することにした。他にどうしようもなかった。後退の道筋は絶たれた。前に広がるのは、しばらく見守ってくれている光と、その周りを縁取る完全な闇。その先は、どんなに目を凝らそうも、詳細はわからなかった。

駅から出ると、立ち並ぶビル群が、アオを見下ろしてきた。

アオは、本当にどうしようか困ってしまって、立ち尽くした。だから、縁石に座る老婆の姿を見つけたときには、少しばかり安堵した。

老婆は、アオと同じ旅人なのか、スーツケースを脇に立て、小さく背を丸めて座っていた。くたびれた灰色の髪を後ろで束ねている。着ている皺だらけのジャンパーは、暗がりでは何色かわからなかった。汚らしいその上着の肩の部分から

は白い綿が飛び出ている。貧相な彼女のその背中も、子どものように小さく、瘦せていた。時折、腕がわずかに動いている。そのたびに、ジャンパーがザリザリと不快な音を立てた。不潔な彼女の髪の上には、羽虫が飛んだり止まったり忙しくしていた。

アオは、まわりこんで老婆の様子を見やった。だが、アオはわずかに目を見張った。

老婆は、湯気立てる黄金色のクロワッサンを食べていた。バターの香りがここまで来ている。老婆は、両手で無造作にその黄金の食べ物をちぎり、静かに咀嚼し続けた。

アオは、しばらくそこで佇んでしまった。だが、自分の問題を解決すべく、老婆の方へ近づいていった。

「すみません、少しお聞きしたいんですけど」

アオが言って近づくと、老婆は顔を上げた。口は変わらずパンを噛み続けている。

「ホテルがどこにあるか知っていますか？」

「あ？」

老婆は聞こえなかったようだ。アオは、さっきよりも大きい声で同じ問いをした。老婆は噛み続けた。

「もう、全部、閉まつてる」老婆は言った。

「そんな。どこか、他に泊まれる場所は？」

アオは言いながら、老婆も同じように途方に暮れているのかと思い、勝手に安心した。

「わからないね。向こうの方に、喫茶店みたいなのがあった。そこはさっき明かりがついてたが、よくわからないね」老婆は、がらがらと、絡みつく痰を喉で鳴

らした。それから、またクロワッサンをべちやべちや噛んだ。

「あなたはどこかで宿泊を？」とアオ。

「行くなら早く行った方がいいよ。店が閉まっちゃうからね」

老婆は手を振って、アオを追い払う仕草をした。アオは閉口して、スーツケースを引きずり、老婆の元から去った。

ビルの間を、アオは一人で歩いていく。黒はどこに宿泊したのだろう。こんなことになるのなら、あるとき、「別行動は嫌です」とでも言えばよかった。前方からの風がアオの髪を乱し、無関心に通り過ぎていく。ビルの壁に貼られた広告や看板を、アオは、のけものにされたような気になりながら眺めていく。どんな誘いの言葉も、アオにはまったく効かない。女優の微笑みも、子どもたちの無垢な笑顔も、キャラクターの楽しみに満ちて伸びる両腕も、何もかもがアオにとって冷徹な存在に思えた。闇に飲まれた誘惑の四角たちは、濃淡の微妙に異なるタイルとなって、ビルの壁に意味もなく張り付いているのだ。アオは、この旅自体が間違いだと思えてきた。そして、夜になると眠ってしまう生き物の習性を、この町の習慣を、呪った。

だから、一軒の光が見えたとき、アオは急いで走っていった。スーツケースがたがた叫ぶ音が、ビルの林に響き渡る。

ちょうどアオが店の前に来たとき、主人らしき男がシャッターを閉めにこちらにやって来るのが、ガラス戸から見えた。男は眠そうな目でアオを見、戸を開けた。

「こんな夜遅くに、何をうろつき回っているんだ？」男には髭はなく、白く綺麗に剃られていた。しかし、眉は使い古した歯ブラシのようにぼろぼろだった。

「今晚泊まる場所を探しているんです。汽車が真夜中についてしまって。お店はすべて閉まっているし……」

「なんだ。観光客か。あいにくここは、喫茶店なんだ」男の顎は、きらりと光る。

「ホテルはどこに？」

「駅の反対側にあるよ。そこへ行くのか？」男は、ぼうぼうの眉毛を上げた。

アオは、この男がここでの食事と宿泊を提案してくれることを期待したが、そううまくいきそうにないことを悟ると、しびしび、「ええ、そうしたいわ」と答えた。

「場所、わかる？」

「わからないわ」

「あそこ、まっすぐ行って、駅に入って、トンネルを抜けるんだ。で、階段を抜けると、でかいスーパーが見える。それから、右手に曲がって、コンビニまで歩いて行って、そうしたら左に曲がる。あとはまっすぐだ」

「ありがとう」

「ああ。おやすみ」

「おやすみなさい」

男はシャッターを閉めるためにアオに背を向け、アオは迷いがありながらも、ホテルへと背を向けた。

五歩ほど進んで、アオは振り返った。

男は、もういなくなっていた。

アオは、今さらになって、もう少し踏み切って、男に送ってもらえないか訊ねるべきだったと思った。再び孤独になったこの心細さは、耐えがたかった。来たときよりも、スーツケースがかなり重く感じる。いっそ、どこかの空き地で朝を待つてしまおうかと思った。それほど、彼女は切羽詰まっていた。

一つの四角い明かりを見つけたのは、もう歩きすぎて足の感覚が痛みだけになってしまったときだった。彼女は、今度は走ってそこへ行く気力はなかった。

ただただ、眠気と疲れの朦朧とした意識を引きずって歩いていくのが精いっぱいだった。

明かりの前には、立ち看板が置かれていた。『四角のホテル』と書かれている。

アオは、透明な戸の向こうを覗きながら、取手を押した。

中は、真四角の空間だった。四隅に、これまた四角い照明が虫のようにくっついている。奥に、コの字型をしたカウンターがあった。凹みの向こうに、髪をびったりと結った女がいる。女は、ホテルへやってきたアオに向かって、少し頷いた。アオは、スーツケースをずりずり、彼女に近づいた。

「お泊まりですか？」

受付嬢は、真夜中にふさわしい、低く静かな声で訊ねた。アオは、彼女の丁寧な話し方に、安堵を覚えた。久しぶりの安心感だった。

「はい」答えたアオの方も、久々に声を出したおかげで、音程は低いものになっていた。

受付嬢は、暗い赤の唇を丁寧に動かして言った。

「本日のお部屋ですが、あいにく、お一人様専用のものが埋まっております。

相部屋でございましたらご用意できるのですが」

「……いくらになります？」

「一泊で五千円を頂戴しております」

「じゃあ、それで」

「かしこまりました。では、こちらにサインを」

言うなり受付嬢は、皺一つない紙を差し出した。下の方に、サインの欄がぼっかり口を開けている。

「サインだけ？」

「はい、結構です」

アオが渡されたペンでサインをする間、受付嬢は鍵を用意した。どこかでモーターの回る音がする。

「お部屋は三階でございます。そちら、右手の階段を上っていただいて、三階の、一番奥まで進んでくださいませ」

受付嬢は、コの字型のカウンターから出てきて、アオから見て右側を手で示した。

そこでアオは、彼女の下半身が機械であることに気がついた。骨盤あたりに洗練された白い円盤。円盤は、足となる一本の車輪を挟んでいる。はっとして女の顔を見れば、あまりにも均一に整った皮膚が笑みを構成していた。

「……ありがとうございます」

アオはぎこちなく鍵を受け取り、スーツケースを転がした。

ロビーの隅にある階段は、螺旋を描いて上へ続いていた。アオはスーツケースを浮かせ、体を傾けながら、懸命に上っていった。

ようやく三階にたどり着くと、アオは端まで進み、部屋の番号と鍵の番号を確かめた。彼女は、一度ロックをしてからしばし待ち、ドアを開けた。

部屋の中は、真っ暗だった。目が慣れてくると、正面にカーテンが半分閉まった窓があり、そこから、小さな橙色の街灯が見えた。部屋の両脇には、それぞれベッドがある。

どこかで、シャワーの音がした。一步、部屋へ入り込むと、左手に洗面所へ続くらしい戸があり、そこから光が漏れていた。

アオは、再びベッドの方へ目を戻した。左のベッドには、開かれたスーツケースがある。アオは、右側のベッドに自分のスーツケースを置いた。

そのとき、洗面所からこちらにやってくる足音がした。

「あら、相方さん？」

その女は、髪をふきふき、登場してきた。肩までの黒髪が、水気を含んで緩くうねっている。彼女は、そんな髪を無造作に拭き続けた。おかげで髪は、肩の上で荒波のように跳ねに跳ねる。彼女の着ているパジャマは、一回り大きいのか、やけにだぼついて見えた。首筋や頬が、髪の暗がりの中でわずかに明るく見える。「今着いたところ？」彼女は、長年の友達であるかのように軽い調子で話しかけてきた。

「ええ、そう。お風呂があるの？」アオは訊ねた。訊ねながら、相手は自分と同じくらいの年齢だろうと推定した。

「ええ、そう、あるよ。でも、あたしはシャワーだけにしておいた。お湯を溜めるのって面倒くさいからや」

彼女は言うや、洗面所へ戻っていった。アオはその間に、スーツケースを開けて着替えを出した。

「そういえば、あなたの名前を聞いてなかった。何て呼べばいい？」洗面所に向かいかけていた彼女は、ドライヤーを持ってきて言った。

「アオよ。あなたは？」アオは振り返った。

「ネイビー・ブルー。ネイビーって呼んで」

ネイビーは、暗闇の中で楽しそうに言った。アオは、とりあえず友好的な相方に安心したが、疲れ果てていた。アオが、「電気をつけてもいい？」と訊ねると、ネイビーはプラグを振り回しながら、「ええ。でも、そっち側だけにして」と言った。ネイビーは、それからまた洗面所に戻って、ドライヤーで髪を乾かしはじめた。アオは、自分の荷物を引っ張り出しては、ベッドに広げていった。

しばらくして、ネイビーが洗面所を使い終わり、アオの使う番が回ってきた。ネイビーは、ふらふらと歩いてアオの横を通り過ぎた。ネイビーはアオのことを、まるで最初からいて、それ以外の何でもないというように振る舞った。気さくに

話しかけるでもなく、ただただ共にいるだけの存在のように。

洗顔し、着替えも済ませて、ようやく落ち着くと、アオは自分のベッドに戻った。ネイビーは、片方のベッドに胡坐を掻いて、何かを覗き込んでいた。ベッドの上には、写真がいくつか広げられている。ネイビーは、それらをつまんではいく種類かに分け、膝をとんとん揺らしていた。

そんな彼女を傍目に、アオは毛布に潜り込んだ。知らない匂い、知らない肌触り。それらは、アオを冷たく新鮮な世界へいざなった。

「消してもいい？」アオは思い出して、自分の方の照明を消そうと、半身を起こした。

「構わないよ。月明かりで見えるからね」ネイビーは、顔を上げずに答えた。

アオはそのとき、ネイビーの写真らに興味を持ったが、結局照明は消してしまった。そして、再び布団に入ると、すぐに眠りに落ちた。疲れていたせいで、アオはネイビーのことなど、それほど気にならなかった。

朝になると、ネイビーがまた洗面所ではたばたやっていた。アオは、そんな騒音を聞きながら、今日はどこへ行くかと、ベッドの中で考えた。

「おはよう」

アオが起き上がって声をかけると、ネイビーがパジャマをぐるぐる巻きにして洗面所からやって来て、立ち止まった。

「おはよう」と彼女。「そのベッドで、よく眠れた？」

「ええ。どうして？」

「だって、岩みたいにかちこちだもん。ところであなた、一人でやって来たの？」  
まるで昨日の続きであるかのように、ネイビーは唐突に訊ねてきた。

「いいえ。ここまで一緒に来た人がいたわ。その人とは、二日後に合流すること  
になってるの」

「ふうん」

「あなたは？」

「あたしも、最初は連れがいた。でも、途中から一人なの。ほんと、いつの間にかね」ネイビーは軽い調子で言った。丸めたパジャマを、スーツケースに突っ込む。

「覚えていないの？」アオは半分呆れて、ベッドから足を降ろした。

ネイビーは振り返るや、肩をすくめて見せた。

「まあ、あまり衝撃的なことじゃなかったからね。同じようなことが、過去に何度かあったからさ。気がつくと、いつもいないの」

「探さないの？」

「探してるよ！もちろん。そのための旅なんだもん」

「ふうん」

「あなたは？」

ネイビーは、朝の淡い光の中で見ると、断然軽快そうに見えた。黒い髪も、健康そうな肌も、どれをとつても緩やかな余裕がある。そんな彼女は、さつと黒髪を横に払い、アオを見つめて問うのだった。「あなたは、なんのための旅をするの？」

アオは、スーツケースから歯磨き粉を取り出した。

「仕事のためよ」アオは短く言った。

「ふうん。仕事って？」

「この町を……よく知るといふ仕事なの」

「へえ！ よくわかんないけど、面白そ！」 ネイビーは明るく、本当に興味深そうに言った。両の眉が跳ね上がっている。「ねえ、この近くに動物園があるの知ってた？ それから、遊園地とか、水族館とか。ああ、映画館もあるらしいよ。このホテルの地下にね」

「地下に?!」洗面所で歯磨き粉をつけたアオは、磨きながらもごもごと叫んだ。

「少し行ってみたい気もする」

「行くべきだよ。少なくとも、あたしだったら行く」

ネイビーは荷物を詰め込みながら言った。そのあとは、朝の支度でばたばたしていて、忙しかった。

朝食をホテルでとろうと思ったが、お金を節約したかったアオは、どこかへ買っていくことにした。そのとき、ネイビーは部屋にいなかった。ホテルの食事をしにいったのか、とにかく部屋は、いつの間にかアオ一人になっていた。

ホテルを出ると、朝の白い光に包まれて、四角く長い建物が、柱のようにそそり立っていた。色鮮やかであるはずの看板たちは、朝早い時間では寝ぼけまなごなのか、ぼんやりとした色を放っている。

少し歩いて、まだ閉まっている雑貨屋の角を曲がると、小さなコンビニがあった。黄色い横線が、建物の一階部分を帯のように飾り立てている。アオはそこに入って行って、朝食を選んだ。

そのとき、飲み物売り場のところにネイビーの姿があって、アオは一瞬立ち止まった。ネイビーは、ガラスの向こうに整然と並ぶペットボトルたちを睨みつけていた。アオは、ホテルの部屋の中だけしか見たことのない人物がコンビニの中にいることに、ちよつとした違和感を覚えた。彼女はここにいるべきではない。彼女はあのホテルのあの部屋で、ドライヤーを片手に洗面所をぶらぶらうろうつい

ているのが似合っている。というより、それが彼女にふさわしい場所、および態度だ。街中のコンビニでペットボトルを吟味するようなことをしてはいけない。似合わなさすぎる。そうアオは思った。

アオは、ふてくされた顔をしているネイビーの元に近づいていった。ネイビーに近づけば近づくほど、ホテルの部屋に戻ったような気分になった。そしてその感覚は、狭いコンビニ内にも広がり、コンビニ自体が自分たちの部屋のように感じるほどになるのだった。商品も、店員も、すべて境がなくなり、消えいつてしまう。

「偶然ね。あなたもここで朝食を？」アオは声をかけた。昨日会ったばかりなのに、驚くほど自然だった。

「野菜ジュースとかにしようと思ったけど、レモンスカッシュが飲みたい気分。だーけど、ここにはなかったの」ネイビーはさっと両手を広げた。

「メロンソーダがあるわよ。二割引きだし」

「嫌よ、メロンだなんて。べたべたして甘すぎる」

アオは少し笑みを浮かべたのち、ネイビーを通り過ぎて、自分の朝食を選んだ。薄っぺらいサンドイッチと、ミルクティー。

買ったあとに店を出ると、ネイビーが外で待っていた。

「ねえ、二日間、ここにいるんだっけ？」ネイビーは唐突に言った。

「そうよ。どうして？」アオは彼女の唐突さに負けまいと、変に平然として言った。

「動物園に行かない？ それか、水族館に。あたし、まだその場所を探してないんだよ」

「連れのこと？」

「そう。あんたも仕事でどっか行かなきゃいけないなら、悪い提案じゃないと思

うけど。どう？」

「なら、朝食を食べたあとに行きましょ。そして地下の映画館を見て、それから動物園。遊園地でもいいけど」

「ああ、いいね。そこならレモンスカッシュ、売っているかも」

二人は部屋に戻り、朝食を済ませた。というより、朝食を食べたのはアオだけだったが。ネイビーの方は、小銭を数えたり、スーツケースの中を整えたり、写真を分けたりと、ベッドの上で忙しくしていた。

地下に行ったのは、それから三十分後だった。ロビーを通り過ぎ、また別の階段で地下に降りた。

地下は、長く続く灰色のトンネルになっていて、換気扇の音なのか、長く連続的な音が、常にこだましていた。しばらく歩くと、左手に赤茶けた両開きドアがあって、『映画館』と書かれていた。ドアの脇には、上映されている映画のポスターが貼つてある。タイトルは、『回転木馬』。尖った鼻を持つ赤色の男が上の方で笑っていて、下に、水色に光り輝く回転木馬があった。木馬たちは、下半身が魚になっていて、足元から優雅に水しぶきを上げている。

「つまんなそうだよ」

突き飛ばすように言ったネイビーの声は、トンネルの中でひどく響いた。上映時間を見ると、つい三十分前にはじまっていたばかりだったので、アオはドアを押し中に入った。ネイビーもついて来た。

だが、ネイビーの言った通り、映画はひどいものだった。二人は、最後まで見ずに映画館を出てきた。

「CGがまずすぎたわよ。木馬の水飛沫なんて、貼り付けみたいだった」アオは顔をしかめた。

「ああいう話は、たいていハッピーエンドだよ。回転する木馬たちがいたじゃ

ん？ 赤の男は、それを壊そうとしてたけど、結局は何もかも元通りになるんだよね。一頭、回転から逃げようとする馬がいたけど、きつと、あいつのせいでみんなばらばらになっちゃうんだよ。それで、主人公がなんとか元通りに直そうとして、赤の男と対決し、やがてハッピーエンドってわけ」ネイビーは、ひらひらと両手を振った。

「動物園に行きましょう。私、ノートを埋めなくちゃいけないのよ。仕事で」アオは、今さらながら黒と約束した仕事のことを思い出して言った。

「動物園より、遊園地の方が手前にある。そこに行ってからにしよう」

「いいわ」

二人は、さっさとホテルをあとにし、バスを乗り継いで遊園地に向かった。

赤いアーチが、来園者を迎えている。長らく塗り替えられていないそのアーチは、まるで来園者をあざ笑っているように見えた。こんな惨めな場所に、笑顔で入っていく人々。この先にある遊具がどれほど平凡なものであるかを知らない人々。園内の現実を知っているのは、赤いアーチのみ。彼はそこで、何も見ない振りをして、密かに笑っているのだ。君たちは何も知らないね、と。

アオは、アーチを見上げながら、ネイビーと共に潜り抜けた。ネイビーは、最初に観覧車に乗ろうと言った。観覧車は、この遊園地の目玉であるらしかった。どうやら、二つの観覧車がサンドイッチのように横に重なって回転しているらしい。アーチにあざ笑われた気分になっていたアオは、そんなものがあつたなんてと少し驚いたし、遊園地を見直した。

平日であるおかげで、人は少なかった。乗ってわかったが、観覧車は二つ組み合わせる必要などなかった。人のいないゴンドラが下から上へ通り過ぎていくだけで、たいして面白くはなかった。しかも景色は、反対側しか見れないのだ。

「これ、もう一個くつつける必要なんてあつたのかしら」

「さあね。あたしは好きだけど。こういう意味のないやつ」ネイビーは足を組みながら、ゴンドラが通り過ぎて邪魔をしない方の景色を眺めていた。

ジェットコースターに乗るために並んでいたとき、一組の家族連れが、彼女たちの後ろに並んだ。男の子と、それより年上の女の子が、両親を引き引きやって来る。女の子が、「ほら見て、あんたは乗れないのよ!」と、慎重を測る張りばてに弟を強引にくっつけて叫んだ。弟の方は痲癩を起して顔を歪ませ、「嫌だ、嫌だ!」と喚いた。

「お前はあっちのやつに乗ればいいだろう」父親が面倒くさそうに、両手をポケツトに突っ込む。

「もう少し大きくなってからねえ」母親は無駄に間延びした調子で男の子の肩を叩いた。

男の子は、わーわー泣き叫んで、手足をこれでもかと振り回した。アオは、ちらとネイビーのことを盗み見た。ネイビーは、『回転木馬』を見たときと同じように、それらの様子を眺めていた、同じ地面、同じ空気にいる者たちを、まるで画面越しに見ているかのように、彼女はこの騒ぎを、ただ黙って見つめていた。「スリルがあるといいわね」

アオは、特に何も考えずネイビーに言った。彼女の気をそらしたかったのかもしれない。

ネイビーは、さっとこちらに振り返って、少し笑った。

「だね。でも、あまり期待できないかも。ほら、この音。がらがらいつてる。車輪が古ぼけてるんだよ。少しでもスピードを感じられれば、十分だね」

「あの子、行っちゃったわ」

アオは振り返って、さっきの家族連れを見ていた。男の子の悲しみは治まらず、その悲しみの重さに耐えきれないかのように、母親の腕にねっとりへばりつい

ていた。

順番が回ってきて、ようやくアオとネイビーは、ジェットコースターに乗ることができた。彼女たちは、ちょうど一番前の席に座れた。

係員によって、安全バーが上から降ろされた。アオは、胃のあたりが興奮で震えるのがわかった。そして、その興奮にのせて、こんなことを口走った。

「あなたの連れってどんな人だったの？」

係員が、隅にある箱型の操作室に入っていく。マイクを手に取り、お決まりのアナウンスをする。それがすむと、がちやりと乱雑にマイクを置き、いくつかのレバーに触れていく。

「さあ。でも、だいたいこんな感じよ」前を向きながら、ネイビーは言った。

「こんな感じって？」

発車のベルが鳴る。一度強い揺れがあつてから、足元で車輪が音を立てて回り始める。前進、前進。弧を描く天井を抜ければ、壁のように、鋭く立ちはだかる坂が見えてくる。

「いつもだいたいこんな感じってことだよ。ほら、こうやって坂を上って行って……」

かたかたかたかた。不安げに車体は上っていく。これでいいのか。自分はこのことできるだろうか。乗客たちを最後まで運んでやれるだろうか。そんな力は、自信は、自分にはない。そんな感じで、車体はどんどん上ってゆく。

「そうして、あるとき突然落下するの。いなくなっちゃうのよ。先が見えない、先が見えない、ってね。そうすると、勝手にどっか行っちゃうんだ」

頂点が近づいて来る。その先には、何も無い。青い空が、視界のすべてをおおいつくす。

「どうするの？」

アオは、青い空を見つめながら問うた。

だが、ネイビーの答えは聞けずじまいだった。コースターは角度をふっと変え、地面に向かって轟音と共に駆け下りはじめた。

車輪が下で悲鳴を上げる。カーブが現れ、そのたびに、体が外へ投げ出されそうになる。右へ、左へ。アオはネイビー、ネイビーはアオ。行ったり来たり。髪は後ろへ引っ張られ、風が鼓膜を殴りつける。

アオは、自分が叫んでいたことに気がつかなかった。笑ってもいたし、怖がっていたかもしれない。

アオは、老朽化が進んでいるコースターの心配ばかりをしていた。もしかしたら、私たちはここで死んでしまうかもしれない。小さなコースターでの、老朽化による不運な死。そうすると、あの入り口の赤いアーチは、役目を終えることになるだろう。この園は閉鎖になり、あの二重の観覧車も消えてしまうのだ。

いいや、もしくは、今と同じようにずっと続いていくのかもしれない。それほど名を知られることなく、多くの人々に絶大なる感動を与えることもないまま、細々と。誰かの思い出作りに一瞬だけ貢献し、やがてその思い出も、人という小さな記憶の器の中で、いつの間にか埃をかぶって消えていく。場所はいつまでもここにあり続けるが、記憶だけは、跡形もなく消えていくのだ。

そう思った瞬間、つかの間のこの疾走が、乱れた髪が、喉から出る叫びが、揺れが、車輪の轟音が、痛いほど愛おしく感じた。それは、必ず滑り抜けてしまう見えない糸を、絶対に掴んで離すものかという哀れな願いに似ていた。

車両は、弧を描く屋根の中に吸い込まれるようにして入っていき、突如として終焉を迎えた。そのスピードの断絶は、アオとネイビーを前のめりにさせた。係員の割れた音声が鳴り響く。「ご乗車、ありがとうございます。ただ今係員が安全バーを外しにまわりますので、そのままお待ちください」

「思ったより短かったわ！」

頬を痙攣させながら、アオは言った。ネイビーも肩を上気させている。だが、彼女は心ここにあらずと言った様子で、視線を自分の中の世界へ漂わせていた。

「あんた、いつまでここにいて言ったっけ？」

ふいにネイビーは言い、アオの手首を掴んだ。彼女の切羽詰まった物言いに、アオの楽しい気分はすっかり消え去ってしまった。

「二日間よ。明後日には去るわ」

係員が安全バーを外しにやってくる。二人を押さえつけていた太い横棒は上へと上がり、二人に開放感を与える。

「どこに帰るの？」

ネイビーの声には、不安と急ぎがあった。

「私の家よ」

「嘘だ！」

切れるような緊張。ネイビーの鋭い瞳が、アオを捉えて離さない。

ネイビーは言う。静かだが、掴みかかるような激しさも交えて。

「あんたの暮らしているその家は、ほんとの家じゃないよ。いいかげん、わかってるでしょ、アオ」

微妙な沈黙を挟んだまま、二人は距離を置いて歩き続ける。どこへ行くのか、どちらも知らない。わずかにひび割れた園内放送。迷子の知らせ。遠くで響く歓声と、近くで通り過ぎる会話の断片たち。「お昼、どこで食べる?」「ねえ、あれ

乗ろう！」「あの、写真撮ってもらえませんか？」「待って、走っちゃダメ！」「結局さあ、あっちで決めた方がいいんじゃない？」「だっこ、だっこ」

アオとネイビーは、それらの言葉の合間を無言で進んでいく。

やがて、前方に赤と白のひさしを伸ばした、小さな食堂が見えてきた。

「飲み物買ってくる。あんたは？」

ネイビーが振り返る。アオは、彼女の顔をまともに見ることができなかった。

「……いらないわ。そこら辺で待ってる」

アオが言い終わらないうちに、ネイビーはさっさとそこを離れていった。アオは無意識にほっとし、近くにあったベンチに座った。

空虚な賑わいが、アオの周りを、少し距離を置いて取り囲む。アオはノートを取り出し、仕事に取りかかることにした。もともと、ここに来たのはこれが目的だったのだ。

ページをめくると、はじめに汽車の中で見た、頬の青い女のスケッチが現れた。足の太い、あの女。もしくは男。あの人は今、変わらず弁当を配り続けているのだろうか。つたない言葉で、型にはまった笑顔を顔に張り付けながら。

次に迫る空白のページたちが、無言の重圧をかけてくる。けれど、それらは同時に何かで埋めてやりたい衝動をもたらした。アオは思いつくまま、今まであったことを洗いざらい書き出すことにした。ときに日記っぽく、ときにメモ書き程度に、さらには、スケッチも加えて。アルミの弁当。クマが住み、フクロウとシカの鳴く山々。闇に沈んでいく駅構内。咀嚼する老婆。眉は伸ばし、髭は綺麗に剃った男。ホテルの受付ロボット。空白の署名欄。それから……。

ネイビーとの出会いのところで、筆は止まった。体の中をやすりで撫でられるような感覚が襲ってくる。

(いいの、彼女のことは気にしないで。彼女、少し変な子だから。『ほんとの家

じゃない』なんてのは、無意味な眩きよ)

アオはそう言い聞かせて、落ち着こうとした。売店の方を見やる。彼女、いったいどこまで買いに行ったのだろう。

アオは、映画『回転木馬』のシーンをいくつか書いた。それから、二重観覧車のスケッチも。だが、どれだけ時間が過ぎても、ネイビーは帰ってこなかった。

周囲の人々は、常に入れ替わりを繰り返す。どこにも同じ顔が存在しない。背格好、来ている服、話し方、どれもぴったり同じ者はいない。それでも、皆が皆、すべて同じに見えてくる。長身だろうが短身だろうが、若かろうが年寄りだろうが、男だろが女だろうが、人形だろうが飲み物だろうが、観覧車であろうが風船だろうが、木であろうが雲だろうが、太陽だろうが影だろうが、すべて視界を構成する一つの要素にすぎない。どれもみな、自分以外の何かでしかないのだ。

その一瞬、アオは、自分の見ている世界が、一枚の絵のように平坦に感じた。自分とは関係があるようで、まるきり関係がなく、どこか空虚でよそよそしい。意味があるようで意味がなく。大切じゃなさそうで、実は重要。そんな欠片たちが、一緒くたになってアオに迫ってくる。とても静かに。とても平滑的に。

だが、アオは突然、その絵の中に、自分自身との強烈なつながりを見つけてしまったのだった。

その人は、まっすぐにこちらを見つめていた。緩やかな髪、動じない姿勢、脱力の中にある力強さ。

その者、ネイビーは、ストローの刺さった紙コップを手に、こちらへ静かにやって来た。座っていたアオは、電撃を受けたかのごとく立ち上がった。

ネイビーはさらにやってくる。

アオは、逃げ出したい思いに囚われた。なぜなのか、自分でもわからない。ただ、ネイビーにはもう近づきたくないと思った。彼女、何か変だ。『ほんとの家

じゃない』なんて、なぜそんなことを言うのだろう。

それを言われた自分は、なぜこんなに怖がっているのだろう。

ネイビーはやってくる。確実な足取りで。こちらへ、まっすぐに。

アオは動けなかった。待つことしか、できなかった。

ネイビーはついに、目の前に仁王立ちで止まった。紙コップのストローはネイビーの方を向いているが、彼女はそれを口に含もうとしない。見ることもしなかった。アオのことを、穴が開くほど見つめている。アオの方はというと、口の中が渴ききっていて、何を言うこともできなかった。周りのありとあらゆるものが消え、ネイビーのみが存在するものとなる。

「あんたが帰ろうとする家は、ほんとの家じゃない。なんであたしがこういうこと言うか、あんたわかってるよね？」

ネイビーは唐突だ。いつでも。アオにとって、今はそれがとても腹立たしく、加えてとても怖かった。

「私には……、家があるわ」

「嘘よ」

ネイビーはがちりアオを見据える。「あんたの言う家は、家じゃない。あんたが言ってるその家は、ただの逃げ場所よ。そんなとこ、本当の家とは呼ばないわ」

「私、ちゃんと家賃払って……」

「家賃とかの問題じゃない！ あんたは、あたしを置いていった。そう、本当の、あんたの家にね！」

アオの喉が、細く鳴った。ネイビーは、暗雲のように迫ってくる。

「あんたは、あんたの本当の場所から逃げたんだ。そうだよ。言っとくけど、あたし、ずっと気づいてたんだからね。あんたが、ホテルの部屋に入った、あの瞬

間からさー！」

「うるさい、やめて！」アオはネイビーの肩を殴りつけた。紙コップが落ち、中身がぶちまけられる。漂うレモンの香り。「あなたおかしいんじゃない?! 人違いよー！」

だが、そんなアオの手首をネイビーは激しく掴んだ。

「あんた、まだそんなこと言うわけ？」ネイビーの瞳が、乱れた髪の毛の奥できらきら光る。「あたしを前にして、まだふりを続けるわけ？ この際だから言うけど、それも長くは続かないからね。写真を見れば思い出すよ。あんたの本当の家のこと。いつつも逃げ出してきた家のこと。その写真に、あんたも一緒に写ってるんだから！」

ネイビーは、ズボンの尻ポケットに手を突っ込んだ。何かを取り出す仕草……。

アオは、たまらずネイビーから手を引き抜き、一目散にそこから駆けだした。

ネイビーは、もう点になってしまったアオの後ろ姿を、じっと見送った。そうして、手の中のくしゃくしゃになった写真に、目を落とすのだった。

そこには、こちらに背を向けて立つ少女の姿があった。空白のキャンバスを前にし、少し首をこちらに向けた、わずかな横顔。広い室内、青く染まるカーテン。逆光のせいかな、周囲の影も、淡く青に染まっている。

その少女の後ろ姿、そして横顔は、まさしくアオそのものだった。

アオは、ためらうことなく遊園地の退場ゲートをくぐった。そして、ちょうどやって来ていたバスに乗りこむと、ホテルまで一人で戻った。この町にはあと二

日間いなければいけないが、もうそんなことどうでもよかった。事態は変わった。こんなところ、一刻も早く去らなくてはならない。あんな変なやつに迫られて、アオは頭がおかしくなりそうだった。というより、この町自体、最初から気に食わなかったのだ。車内販売の男、貧し気な老婆、顎だけ剃った男、機械女、映画、遊園地、そしてネイビー。何もかもが、ほんのわずかに齟齬を持つ。流すこともできるが、どうしても不安が底に残る。不協和音が響いたまま、消えることなく留まり続ける。

ホテルの部屋に戻ると、アオは急いで荷物をまとめた。昨日ぶちまけたばかりの物たちを、すべてスーツケースに詰め込んでいく。アオはもう、一人で列車に乗って帰ろうと考えていた。

そうして、受付ロボットの前を飛ぶように通り過ぎ、ホテルから出た瞬間、何者かとぶつかった。

それは、黒だった。

「おや、アオさん。お急ぎのようですね。どうなされたんです」

アオは啞然としたが、勢いに任せて、塞がれつつある彼の横を通り過ぎようとした。

「もういいの。私、ここを出ます。もう旅行なんてこりごりだわ!」

「何をおっしゃっているんですか。お仕事は、まだ残っています」

「いいからどいて! 早くしないと、あいつが戻ってくるから!」

「あいつ……。ああ、では、お会いになったということですね」

アオの動きは止まった。

「今……。なんですって……」

「お会いになったんでしょう? あなたを探している者と……。いや、あなたが探していたもの、と言うべきでしょうか」

「……何を、言ってるの」

黒は、アオのことをじっと見下ろした。

「あなたは、非常に周りのことに目を向けておられる。そこに感動を見出す力も十分にお持ちだ。しかし、切符の先の世界を知ることにかけては、常に恐れがちになる」

黒はそう言うや、片手をさっと差し出した。アオは困惑した。

「切符を」彼は言った。

アオは、恐る恐る、ポケットに入っていた切符を取り出した。旅に出る前に、黒から渡されたあの切符を。

それは、変わらず矢印を示していた。矢印の向く先は、自分の胸元であった。アオは気持ちが悪くなって、黒の手の中に切符を押しつけた。だが、黒はそれよりも早く、アオの手を掴んで切符を押し戻した。

「ノートは埋まりましたか？ この町で見たもの、感じたもの、ありとあらゆる……」

「知らないわ！ もうこんな意味不明なことはたくさんよ！ どっか行って！」

「女であり、男でもある販売嬢。貧しそうな老婆は、黄金色のクロワッサンを食べ続け、眉が伸びた男は、顎を光り輝くほど剃り、安堵を感じた受付嬢は、自己を持たぬ機械として、あなたを迎える。逆行する二重の観覧車、泣く弟、威張る姉。その両方は、どちらも遊具に乗ることはできない。……あなたの中では、こんな物語が刻まれた。相反するもの、その二つが共存する世界が」

アオは、黒の手から逃れようとした。だが、黒はしっかりと握ったままだった。

「あなたは、それを認めなければならぬ。この世界のことを。彼女のことを。

……自分のことを」

アオは、じっと黙って静止した。そうして、黒のことを、ゆっくりと見上げた。

彼女は、もう黙っていられなくなった。今まで隠してきたが、もう我慢ならなかった。

「……私は、彼女から——あいつから逃れるために、あの部屋に籠ったのよ。なのに、なぜあなたは認めると言うの!？」

そうして彼女は、スーツケースをねじ込むようにして黒を押しつけ、ホテルを出ていった。

黒は、乱れた黒い上着をぴっと伸ばして、アオを見送った。彼の顔には、少しばかり険しさが浮かんでいた。

「いずれ、嵐は起こる。あの子でなくとも、いずれは誰かが起こす。そのための準備は、しなくてはなりません。……でなければ、あの子やあなたも、永遠に彷徨ったままになります」アオが去った方角を見つめていた黒は、さつと後ろを振り返った。

そこには、ネイビーが立っていた。ネイビーは、アオと黒の両方を、交互に見つめた。

「追いかけてくちや。あの子はいつともあたしを無視するの。いいかげんやめてくれないと。……今度は容赦しないから」